斯くやあらん

アグナ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

汝、見果てぬ夢を目指す者よ。
あらゆる好敵手たちを打倒して、輝く頂に昇りつめるのだ。
努力すれば才能にも及ぶのだと。
煌めく決意で天昇せよ。
非才の挑戦者は斯くやあらん。

※筆折作『光あれ』のリメイク盤。
正直、クロスオーバー先まんまで転用するのは無理があったのだ……。

もっと早くに気づけば良かったのに。

目次

朝日、昇る ―― 1
学徒たちは春風に語らう ―― 13
新世代 ―― 31

朝日、昇る

――何も出来ないお前は、何もするな。
絶対的な勝利者が君臨する敗者の血の池で、父はそう言った。
『鉄血』の字に相応しい、巌のような厳しい顔で。
――秩序とは、我慢だ。故に序列とは絶対で無ければならない。
社会とは秩序によって成り立ち。秩序とは即ち我慢である。
弱者が強者に勝つ。一人の人間が組織に打ち勝つ。
それは何て耳障りの良い、おとぎ話。
常に支配される側である民衆にはさぞ焦がれる夢なのだろうが……。
下剋上が罷り通る世の中の悲惨さを人は戦国時代で知っている。
資格無き者が天下に取れる。
その結果は、屍山血河だった。
力なき者は淘汰され、英雄豪傑すらも露と消えた地獄。
本当に守るべき無辜の民は喘ぎ死に、明日に希望など無かった。
誰もが剣を握れる時代とは地獄だ。

人は誰もが力を持っているわけではない。
力ない故、人は村となり、街となり、文明を築いた。
前提として大多数の弱者によって構成される人は弱いのだ。
故に力なき者が淘汰される世の中とは、地獄である。
勝ち残れるのは極少数の強者と突然変異種だけ。
そのような地獄に一体何の価値があるという。
嘗ての時代を築かないためにも。
歴代の支配者達は、支配を盤石のモノにすることへ固執した。
安易にルールが破られないように、簡単に弱者が暴走しないように。
銃が無ければ、容易く人は殺せず。
機会が無ければ、容易く人は決断できず。
大切なものが多ければ、容易く人は捨てられない。
そうして多くの枷で支配者は弱者の目を耳を足を閉ざす。
人が剣を手に取らないように。弱者が強者へ挑まないように。
頑張れば出来る——そんな真実に気づかないように。
平和を、秩序を守るためにも序列は絶対で無ければならないのだ。
——だからこそ、お前の願いを私は、秩序ゆえに否定する。

黒鉄家――それは日本の秩序である。
平和を担う侍にして、秩序を守護する騎士。
彼らの役目は日本の人々が安寧に暮らせる世の中を守ること。
そのためにも組織図は絶対のモノ。
命令は上から下へ伝達され、速やかに実行される。
不平不満は生まれず、上司の命令は絶対。
鋼の結束に歪み無く、故に万事盤石で駆動する社会の歯車。
そこでは何より誰より、力(さいのう)の序列が優先される。
鋼の結束を壊さぬためにも、弱者が強者に勝ることを認めてはならない。
――騎士の力は総じて魔力量(しかく)と能力(さいのう)によって、決定づけられる。これに嘘偽りがあってはならんのだ。
鍛えれば才能を越えられる。
努力すれば上回ることが出来る。
成る程、それは美談である。
だが、そんなものは例外だ、基準にするべきものではない。
そもそも才能を越えるために限界に限界を超えられる人間がどれほど居るだろうか。
叶うかどうか分からぬ可能性に全身全霊を掛け、血の滲む努力を重ねられる人間は。

そう、努力は当たり前に痛いのだ。
身を削ることは苦痛であり、頑張ることはとても辛い。
努力する、努力する、努力して努力して、そして超える。
そんなことが出来るのは、出来る奴だけだ。
弱者が参考にするべきものでは無い。
——余計な幻想を見せて、秩序を無駄に掻き乱しても、待っているのは非常な現実だけだ。才能が絶対のもので無いことはお前に免じて認めよう。それでも、才能は絶対の序列で無ければならないのだ。
変な我執で、結束を砕かせないためにも。
変な希望で、未来に絶望させないためにも。
——許せ一輝。私は、例外を認められない。
他ならぬ父から、その存在を否定された。
ならば——————。

「分かったよ父さん……それで構わない」
僕は——俺となることを受け入れた。

☆

「……ず……くん」
「し……み……くん……むぅ、い……き……ってば」
「……んぅ」
――懐かしい過去（ユメ）を見ていたようだ。
そうだ、俺はあの日、全てを受け入れた。
受け入れた上で目指そうと決めたのだ。
才能が無くても。努力は決して無駄じゃない。
諦めなければ何時かきっと夢は叶うのだと。
自らの足跡で以て証明しようと。
だからこそ俺は……！
「一輝ッ!!」
「うわっ――とぉおお!?」
思わず決意（モノローグ）は中断される。
耳元で炸裂する大声。
ビックリして目を開けば、そこには超至近距離（アップ）の顔。

それに二重で驚いて、俺は身を捩って抜け退けた。
「あ、アディ……？　急に大声を出されたら驚くじゃ無いか。それに君はもう少し慎みをだね。仮にも付き合ってない若い男女がそんな簡単に……」
「大丈夫よ、一輝だし。早々に欲情して襲いかかるほど貴方の理性は弱くないでしょ」
一輝の文句など何処吹く風か。
忠告をすまし顔で聞き流すのはアーデルハイト・キルヒアイゼン。
破軍学園の二年生であり、一輝にとっては同級生兼ルームメイトだ。
絹のような金髪と透き通る藍色の瞳はドイツ人の母から、柔和な顔立ちと歳に見合わぬ長身を日本人の父から継いだハーフで、その容姿は問答無用に学園内で一、二を争うほどの端麗さ。
そのため、日々学園内では彼女のファン達による応援と、一輝に対する呪詛が叫ばれているとか。
まあ、そんなことはさておき……。
「いや、そういう問題じゃないと思うんだけど」
……まずは、この少々貞操観念の薄い彼女に苦言を告げなければなるまい。
そんな一輝の心遣いに変わらず知らんと返すルームメイト。
「それにもしもの時は責任取って貰うから。ほら、私のお父さんとお母さんは出来

ちゃった婚だし」
「それとこれと一体何の関係が……っていうか、え？　あの戒さんが出来ちゃった婚？
馬鹿な……」
知らなかった事実を聞いて一輝は素で驚く。
戒……というのは彼女の父親の名である。
孤児院を経営する四十代の男性で、歳に見合わず未だに若いお兄さんにしか見えない
その容姿は近所の奥様方から大変人気で、いつも囲まれては困ったようにしている。
物腰柔らかく、人格穏やか。
争い事など縁はないと言った見た目は正しくいい人の典型である。
そんな彼が出来ちゃった婚など、全く想像ができな――。
「何でも、いつまで経っても『僕は君を穢したくない』的な優柔不断さに我慢の限界を覚えたお母さんがお父さんを襲って……」
「成る程。戒さんには悪いけど納得だ」
どうやら狼は戒さんでは無くそのパートナーの方だったか。
まあ、彼ら二人の関係や性格を考えれば納得がいく。
「だから一輝も気を付けてね？」
「はっ？」

「血筋か何かは知らないけど、うちは女性の方が割と気が強い家系だから。叔母さんは未だ高校生からずっと好きな人にも告白できないヘタレだけど、私は違うから。略奪愛とかもありだから」

「……なるほど？」

むん、と無表情（いつもの）顔で言うアーデルハイト。

何を気を付ければ良いのかよく分からないが……。

女性を甘く見るなということを言いたいのだろうか。

「何故俺が注意される側に？　……まあ、よく分からないけど気を付けるよ。それとおはよう。アディ、手間を掛けてすまない」

「ん、新妻の朝のお勤め、礼は不要。でも苦しゅうない」

「はいはい、冗談もほどほどにね」

ともあれ、朝の目覚めである。

態々起こしてくれた彼女に礼を言いつつ、一輝はベッドから降りる。

何故か一輝の返しに憮然としているクラスメイトに背を向け、眠気覚ましにシャワーを浴びるため居間を後にする。

――数分後、朝食を用意してくれていたらしいアディと共に一輝は席に着き、テレビ

をＢＧＭに二人で朝食を突いていた。
「――ところで一輝はどうなの？」
「どうなの……って言うと？」
「ん、そのテレビに映っている彼女。皆の注目株さん」
顎でクイッとテレビの方を指す彼女に一輝の視線が流れる。
画面には真紅の髪を持つ少女がマスコミに笑顔で対応している。
字幕に流れる名はステラ・ヴァーミリオン。
欧州にあるヴァーミリオン皇国の第二皇女である人物だ。
「皇女殿下の日本留学……世界でも少ししか居ないＡランクの魔導騎士で、美少女。学校じゃみんな話題にするし注目してるけど、一輝はあんまり気にしていないようだから」
「ああ……いや別に興味が無いわけじゃないよ？　俺も綺麗だと思うしって痛！」
「足が滑った」
「えー、今のは……いや何でも無い」
明らかに踏み抜かれたが、抗議しようと目を向けた先には感情の窺えないすまし顔。
完全に謝る気も反省する気もない彼女に先に一輝が折れた。
なので抗議の言葉を捨て、質問に答えを返すことに専念する。

「俺だって少しは興味を持ってるさ。でも今はそれ以上に気にしなければならないことがあるからね。新学期が始まればすぐに選抜戦が始まる。目下、そこに向けて集中しているから他に目を向ける余裕が無くて」

「そう……でも彼女はAランク。学生ながら既に高位の魔導騎士に引けを取らない逸材よ？　試合で当たった時どうしようとか一輝は考えないの？」

「まだ当たると決まったわけじゃないからね。でも戦うことになってもきっと俺は負けないよ、少なくともそのつもりは一切無い」

勝負に絶対は無いし、勝負は時の運だ。

強い方が必ず勝つとは限らないし、努力や環境で簡単に裏表が入れ替わることだってある。

だからこそ勝負事に絶対や必ずはないのだ。

でも……その上でやはり敢えて言う。

だって重要なのは心だから。

必ず勝つという宣誓、絶対負けぬという決意は進むための推進力になる。

戦うための起爆剤になる。

気合いや根性、それらは所詮心の情動に過ぎないが。

されど心の情動こそが人間の何にも勝る力である。

〝決意〟は人の持つ最大の武器である。
勇気と気力と夢さえあらば、人は何処にだって往けるのだ。
「だから俺は敢えて言うんだ――俺は必ず〝勝つ〟のだと」
「トンチキ理論。主人公属性の特権ね」
「人は誰だって、自分の人生の主人公だと思っているよ」
「そう思える人はそんなに多くないと思うけど……でもそうね。貴方ならやらかしそうだわ」
「やらかすって言い方に悪意がないかい？」
「やりそう、よりは貴方に似合う表現よ」
「酷いなぁ」
共に雑談を交わしながら箸を進める。
何だかんだで高校をずっと共に過ごしてきた彼女とは気が知れた仲であり、彼女自身、性格も相まって言葉を言い繕わないので一輝とは本音で語れる。
出生と去年の『やらかし』のせいで同級生からも先輩からも敬遠されがちな一輝としては、この数少ない友人の存在は非常に有り難く、また素であることが出来た。
「そうだ……忘れてた」
「ん、どしたの？」

そんな一年の付き合いを振り返って、一輝はふと思い出す。
二年生になってから、やって済ませておくべきことを済ませてなかったことに。
そう、彼女とはまた一年、卒業まで共に過ごすことになるのだ。
なので……。
「今日からまた一年――よろしく頼むよ、アーデルハイト・キルヒアイゼン」
「ん、よろしくしてあげる。ボッチめ、喜ぶが良い――芦角一輝」
春麗らかな桜舞い散る新たな年の始まり。
二人は握手を交わす。
また一年、友情が続くことを誓うように。

学徒たちは春風に語らう

《伐刀者（ブレイザー）》。

古き時代には魔女や魔術師、そして今の時代には超能力者などと呼ばれる異能使い達である。

己が魂を武装――《固有武装（デバイス）》として顕現させ、魔力を用いて異能を司る千人に一人の逸材。

卓越した異能者たる彼らは時には時間や空間、概念といったものすら操り、熟練の異能者であれば一個軍隊を一人で相手取ることも可能という。

人でありながら人を超えた奇跡の使い手。

それが《伐刀者（ブレイザー）》という存在である。

今や彼らは社会を構成する人材として時代に欠かせる存在では無く、警察や軍隊……戦いにおいて如何に彼ら、優れた《伐刀者（ブレイザー）》を確保できているかが、明暗を分けると言うほど、彼らの武的な価値は圧倒的だった。

だが、大きな力には責任が伴う。

暴力は、所詮暴力。

例え国防のためとはいえ、自由な能力の使用は秩序の破滅を呼び、無秩序はやがて大きな災禍となって人間社会を襲うだろう。

だからこそ、《伐刀者（ブレイザー）》は《魔導騎士制度》というものによって自由な能力の行使と、《伐刀者（ブレイザー）》としての社会的地位を拘束される。

力のある大国によって結ばれたこの制度は、《伐刀者（ブレイザー）》の能力規約他、指定の専門学校を卒業していないと能力者として能力の使用を認めないなど様々なルールが厳格に定められている。

日本――――『破軍学園』。

ここもまた全国七カ所に設置された魔導騎士養育機関の一つだ。

『学生騎士』として此処を無事に卒業できたものにのみ、魔導騎士として、《伐刀者（ブレイザー）》として、異能を使える騎士として認められるのだ。

「――えー、というわけで。今日からお前達新二年生を担当することになった芦角英恵な。面倒事は嫌いだから、青春だ何だとはっちゃけて問題とか起こさないでくれよ頼むから。それから恋愛相談とかしてきた奴、マジ捌くぞ」

「「……」」

さて、そんな騎士の登竜門では今まさに新学期に伴い一新されたクラスと新たなクラス担任による自己紹介が行われていた。

卓上の女教師――芦角英恵は義憤のオーラを纏いながら担当する新二年生たちを威圧する。極めて私情に満ちた理由で。
「いいか？　テメエら砂利共に、『キャッキャうふふのアオハル！』とかマジ無いから。忘れんなよ？　此処は騎士の学校だ、お前らは精々《七星剣舞祭》でも目指して切磋琢磨しながら血の汗流すような青春だけで十分な。先輩後輩マネージャーから始まるドキッ！　っ的な展開は私が居る限り絶対に無いと思え、という訳で桐原ッ！」
「へ？　なんッスか、芦角先生？　僕は何も――」
「お前さっき、女を引っつれてハーレム野郎気取ってたよなァ……というわけで後で雑用な。私のパシリ決定」
「えええええええ!?　そんな理不尽なッ!?」
「黙れ！　クソがッ!!」
「黙れ!?　クソが!?」
「お前たち……お前たちに分かるか……？　目の前でお前達砂利共の青臭い青春模様を見せられる私たち教師の気持ちがッ……！　私にだってなぁ、私にだってなぁ、若い時はあったんだよ!!　青春する時間はあったはずなんだよ、だのにどうして、どうして、私に彼氏はいないんだよぉ!!?　何処かに素敵で手頃なイケメンはいないのかよぉぉおいおいおい……!!」

「いや知りませんよ。そんなんだから二十八年も喪――」
「映せ――《八卦閃》」
「ちょ、それ《固有武装（デバイス）》――」
　あああああッ！　っと轟く悲鳴。
　二年生のまだ慣れない教室は早速、大荒れだった。
　《運》を司る異能の顕象。それに伴って行われる無差別攻撃は件の生徒他を巻き込んで起こり、教室内では悲鳴やら怒号やら嘆息やらが巻き起こる。
　騒ぎを目の前に一輝は目も塞ぎたくなるような惨状に顔を伏せる。
　そんな一輝に対し、隣の席となったアーデルハイトはちょいちょいと一輝の袖を引いて……。
「いいの？　アレ、保護者でしょ？　学園内での異能の無断使用は普通に校則違反なんじゃ……」
「ああ、多分大丈夫だよ、芦角先生だってその辺分かっているから本気は出していないだろうし。ほら、ランダム攻撃も対した威力は……」
「ぐあああああああッ!!」
　丁度、一輝がそう言いかけた時、件の少年が壁に突き刺さる。
　一輝の目は死んだ。

「……」
「あれが手加減？」
「生徒思いなのは本当なんだ。信じてくれ。この時期以外はまともなんだよ……」
「そう……」
破軍学園教師、芦角英恵。
Bランクの魔導騎士であり、他ならぬ今年度からの一輝のクラス担任である。しかし一輝は、彼女とはそれ以上の繋がりを持っていた。
というのも芦角という姓からも分かるように、彼女は一輝の社会的な保護者でもあるのだ。
「家の事情で放逐された俺はそのまま行けば孤児院行きだった。でも家出の事情が事情だからね。俺の家の事情はアディも知っているだろ？　そのせいで俺はどの孤児院にも受け入れられることが出来なくてね……」
一輝の旧姓……その名を黒鉄という。
それはこの日本国において古くから《伐刀者（ブレイザー）》、ひいては日本の国防を担ってきた名家であり、第二次世界大戦において日本を勝利へと導いた英雄『サムライ・リョーマ』を排出した家でもある。
そんな家の本家直流の血筋に生まれた一輝はしかし、『とある事情』で家を追い出さ

れ、その存在を抹消されてしまった。

さらに一輝を追い出した後も、黒鉄はどうしてもその存在が認められなかったらしく一輝が社会的に復帰出来ないよう、まだ一桁の子供に対してあまりにも過剰な社会的な制裁や裏の伝手を使った抹消計画などで一輝を追い詰めた。

「あの時は特に実感したよ。世の中は総合値だ。神話の英雄みたいに武一辺倒だけでは生き残れない。才能、人脈、金銭、社会的地位……後は運か。そういう力を持てるだけ持っている方が圧倒的に強いとね。そりゃあ努力することも大事だけれど、それだけに頼ってしまうのもまた間違いなんだと」

「でしょうね。どんなに優れた才能の持ち主だろうと、社会でバッシングを受ければただそれだけで詰む。例えば学者が新たな細胞の発見を叫んでも、認められなかったようにね。まあ、あれが真実だったかどうかは怪しいところだけれど……」

「重要なのは真実であってもそれが多くの人に否定されれば容易くねじ曲げられてしまうこと……だろう?」

「ええ。力には色んな種類があるけれど、そういうのは持てるだけ持っておくだけでお得なのよ。例え、親の七光りで貰えるものでもね」

「ああ、散々実感したよ。後悔こそしてないけど、正直考え無しだったと反省しているよ」

勘当されたこと、家を出たことに関しては一輝と父親、互いの意思が一致したがゆえの結果であり、そこに対して後悔は無い。

だが、その結果訪れた数多くの苦難はある程度予測できた結果であり、また回避できたかも知れない結果でもある。

少なくとも事前の準備や手回しをしておけば、あのような苦境に陥ることは無かったはずだ。

「そんな実家の力で色々追い詰められている時だったな。曾祖父の友人だったって言う――柊さんに助けられたのは」

そう、日本にいたもう一人の《英雄》柊四四八。

かの存在の手によって一輝は保護された。

その後、彼の知人だという女性の孫娘……芦角英恵の下に紆余曲折あり、預けられたのだ。以降、彼女とは保護者と被保護者の関係なのである。

「だから柊さんは勿論、英恵さんにだって凄く世話になっているし、助けて貰っている。特に名義は英恵のお母さんが俺の保護者だけど普段は全部、英恵さんにお世話になってるからね。俺にとっては恩師で……うん、凄くいい人なんだよ」

「ふーん、いい人、ね」

そう言って芦角の方へと目を向けるアーデルハイト。

「だッしゃあああああああ!!」
「ぎゃあああああああああ!!」
そこにはいつの間にかジャーマン・スープレックスをキメられる桐原の姿が。
「……いい人？」
「……ノーコメントで」
一輝は現実から目を逸らした。

……
……。

騒々しい新学期のスタートから三十分後。
新担任の自己紹介も済んだ頃に、一年生の頃から恒例になっている面子で放課後を過ごしていた。
「酷い目にあった……ねえ、一輝クン。アレは君の何かだろう。友人を助けようとか思わなかったわけ？」
「無茶を言わないでくれよ桐原くん。この時期の芦角先生の荒れ具合は俺程度に同行できるものじゃないんだ。特に青春を謳歌している人には当たりが酷くなる傾向がある

から……まあ、青春税ということで」
　困ったような笑顔で一輝は友人であり、前年度の《七星剣舞祭》でベスト８に入賞した猛者でもある少年、桐原静矢に言葉を返した。
「何、その理不尽な徴収制度」
「妥当。ハーレム野郎にはあのぐらいの扱いが丁度良い」
「おいコラどういう意味だキルヒアイゼン」
「まあまあ二人とも」
　顔をヒクつかせる桐原に、毒舌のキルヒアイゼン。
　そしてその間を取り持つ一輝。
　三人の仲はこのように一年の頃から配役変わらず健在だった。
「にしてもまさか新学期から担任が芦角とは……早速気分が憂鬱だ」
「芦角先生は良い先生だよ？」
「僕への当たりが強いことを除けばね。知ってるだろう、あの先生モテる人間には男女構わず当たりがキツイの。ほら、偶にＯＢで来るあの執事を筆頭に嘗てか今かで青春の日々を過ごした生徒ならなりふり構わずだ」
「そういえば水希先輩にもさっきみたいな態度だったわね……大杉さんには別の意味で当たり強かったけど」

「あははは……アレはあの人が悪いんじゃないかな？」
今や国防軍として従事する顔見知りにして破軍のＯＢである者たちの顔を思い出しながら一輝は苦笑する。
破軍でも指折りの有名人である彼らは、その有名逸話のせいもあって芦角先生と特に仲が良かった。
そのせいもあって色んな意味で彼らのやり取りは親しいものだったのだ。
「ものは言い様ね」
「……ナチュラルに僕の心を読まないでくれよアディ」
苦笑する一輝の顔を見て、内心を読み取ったのだろうアディの指摘にげんなりとする。
いつか擁護しにくい話題もあるだけに全くの図星である。
特に『修学旅行覗き事件』などはほぼ犯罪行為だろうに……。
「そういえば有名と言えば――」
と、不意に桐原は話題を変えるように話を切り出す。
「有名といえば今年の一年生にも有名人が入学したじゃん？　名前は確か――」
「ステラ・ヴァーミリオン」
「そうそう、それ。ヴァーミリオン皇女殿下！　いやあテレビで見たけど中々悪くない

見た目だったよ。後で生の姿を見たいと思うぐらいにはサ」
「注目ポイントはそこ……？」
「桐原君は相変わらずだね……いつか彼女に刺されるんじゃないかな？」
「……君がそれを言うかい？」
「……貴方がそれを言うの？」
「え？　え？　何で僕が悪いみたいな流れ!?」
突然、ジトッとした目を向けられて動揺する一輝。
彼は知らなかった。
その柔らかな物腰と早朝から日々鍛錬を欠かさぬストイックな生活、そして何より可愛い部類に入る顔立ちが女性受けしていることに。
そのため、彼を応援するファンクラブが存在することに。
「鈍感主人公ってある意味、ハーレム野郎よりウザくね？」
「サイテー。女心を無意識に弄ぶ奴は死ねば良い」
「い、謂われの無い罵倒が僕を襲う……？　あ、あーそうだ、ステラ・ヴァーミリオンさんといえば」
「逃げたな」
「逃げた」

「ヴァーミリオンさんといえば！　世界でも数少ないAランクの学生魔導騎士だったよね！　桐原くんのそれとは違いけれど俺も興味があるな!!」

流石は《剣聖》と通り名も有名な高位騎士だけあって一輝は不利を悟るのが早かった。話を強引に本筋に戻すことで戦場からの離脱を試みる。

「魔力保有量Aランクといえば、プロの世界でも数限られる最高ランクの頂だ。きっと今年の《七星剣舞祭》でも彼女は優勝候補に入るに違いないよ」

「彼女が《七星剣舞祭》に出ればの話だけれどね」

「出るんじゃない？　態々、研鑽するために外国にまで留学しに来たんでしょ？」

「俺も同じ意見だよ」

騎士の学校というのは《魔導騎士連盟》に加入している国であれば何処であれ存在している。それは無論、《連盟》に加入している欧州の小国、ヴァーミリオン皇国とて同じ事だ。

外国事情には諸事情で少なからず知識の広い一輝はかの皇国内にも騎士学校があるのを知っている。

大国が同盟して出来た《同盟（ユニオン）》ならば独自に学校を作らない限り、騎士学校というものが存在しない場合もあるので話は変わるのだが、少なくとも《連盟》に限っては加入している国ならば、それぞれ個別に支部が配置され、魔導騎士の養育機関が設置されて

いるはずだ。
「それなのに態々彼女は留学を選んだんだ。この日本にね」
「あー、日本は何だかんだで魔力研究が盛んに進んでんだっけ？　第二次世界大戦の遠因はその研究成果を巡ってだとか何とか……？」
「うん。魔導騎士の扱う異能や魔力に関してはまだブラックボックスの部分が多いからね。そこを正確に解析できれば稀少な魔導騎士をある程度、狙って生み出すことが可能だ。……戦後もそうだけれど、日本はアジアでも有数の魔導騎士研究先進国だからね」
「都市伝説染みた噂だけど大戦中には異能を使う人造機械の兵士を生み出した、とか。夢の世界から異能を引っ張ってきて全国民を魔導騎士にする計画があった、とか。まことしやかに語られてるぐらいだものね」
「それをいうなら君の母国も大概だろう？　ヒムラーだっけ？　聖槍十三騎士団・黒円卓の話は？」
「実質はハイドリヒ親衛隊大将の、だったけれどね。うちの家系図に所属していた人が居たらしくて、お母さんが顔を顰めながら教えてくれたわ」
「ああ、あっちも大概、魔導騎士に関する研究では変態レベルだったっけ。向こうの都市伝説は異能を極めて全世界の神様になるってかなりぶっ飛んでたよく覚えてるよ。日本もそうだけど、枢軸側の国は何処も変態揃いの国々ばっかだよね。イタリア辺りも

ローマ関係で後ろ暗いし」
「……って話が歴史にズレてるよ、二人とも。僕が振っておいて悪いけど」
いつの間にかステラ・ヴァーミリオンの話から世界史に話がシフトしていることを指摘する一輝。
確かに世界史は今に続く情勢の重要な話ではあるものの、今の話題は件の留学生だ。
「そういってもねえ。僕としては美少女ぐらいの印象と話題しか無いんだけれど？　Aランク魔導騎士とか何とかは散々テレビで言ってたし……あ、後、アレだ。胸が高一にしては大き――」
「あ、手が滑った」
「イっ……キリト!?」
「桐原君!?」
手が滑ったと宣いながら超高速で桐原に足を引っかけるアーデルハイト。
上位に与する騎士とだけあって、アーデルハイトの前振りに一瞬で身構えていた桐原も予想拳撃（フェイント）を入れた上での足払いでは反応しきれず、奇妙な悲鳴を上げながら顔から床に叩き転がる。
ビタンッという割と洒落にならない音に一輝が悲鳴を上げた。
「乙女の前で胸の話は死線と知りなさい」

「……」

倒れる桐原にフンとアーデルハイトは言い切る。

その言葉に対して「いや、君も言うほど貧乳（無いわけ）じゃないのでは……」と一輝は口に出かけるが、桐原の惨状を傍目に見てぐっとこらえる。

「む、胸はともかく、実力の方は少し気になるよね。異能は確か焔を扱う力らしいけど、どれぐらい強いのか。まあ今年の首席入学生だから相当に使うとは思うけれど……」

「桐原静矢（そこの馬鹿）と違って、真っ先に強さを話題に取る辺り一輝は相変わらずね」

嘆息するようにアーデルハイトは一輝に呆れの目を向ける。

桐原がこの通り、アレならば一輝もまた違う意味でアレなのだ。

「というか朝は選抜戦でそれどころじゃないって言ってなかったかしら？」

「興味が無いとも言ってないよ。それに選抜戦には彼女も出るだろうからね。何れは試合う相手に無関心で居られるほど俺は泰然としてないよ」

魔導騎士の祭典と言えば『ｋｉｎｇ　Ｏｆ　Ｋｎｉｇｈｔｓ』こと『ＫＯＫ』、全世界でも有名な伐刀者（ブレイザー）同士の格闘競技が話題に出るが、日本の場合はそれ以外に全国七校の魔導騎士学校で争われるその年一番強い学生騎士を決める魔導騎士の祭典《七星剣舞祭》が有名だ。

《七星剣舞祭》では、この破軍を初めにそれぞれの学校は毎年各学年混成で選抜された

騎士を送り出し、全国で覇を競わせ合う。特に、破軍の場合は去年度までは『能力値』による選抜方式を採用していたものの、今年からは『選抜戦方式』……つまり校内で開かれる試合で成績を残した者が学校を代表する騎士として《七星剣舞祭》に出場する権利を得ることが出来る。

『選抜戦』はランダム選考で試合が組まれ、その成績順に《七星剣舞祭》の出場選手が選定される。つまり、確実に選ばれたいのならば、一回の敗北も許されない厳しい戦いになるのだ。

「一年とはいえ、Aランク魔導騎士というなら彼女もまた『選抜戦』では上位に食い込んでくるだろうからね。ライバルの動向を気にするのは同じ出場希望者としては当然だ」

「一輝、去年は出場権利を得るチャンスも無かったからね……まあそれが『例の事件』の原因にも繋がったわけだけど……あんまり気負ったらダメだよ?」

「分かってるよ。去年のように君や桐原君に心配をかけるわけにはいかないからね」

「全くだよ。そのせいで僕たちが去年はどれだけ大変だったか」

「あ、起きた」

ムクリと立ち上がる桐原。

服には埃やら何やら色々付いているが、無事ではあったらしい。

「あ、起きた。じゃないよ全く！　君はまず手が先に出る癖をどうにかしたまえ」

「手じゃ無いし、足だし」
「どっちも同じだよ！　――ともあれ。一輝クン、そういう話ならばヴァーミリオン皇女殿下ばかりに目を向けるのはどうなのかな？　ライバルというならば僕もまた君の前に立ちはだかる試練だぜ？　今年こそは優勝を狙って出場するつもりだしね僕も」
そう言って桐原はシニカルに笑う。
去年の《七星剣舞祭》においては準優勝を果たした『天眼』こと城ヶ崎白夜にしてやられたことから、彼は前々からリベンジに熱意を燃やしている。
桐原もまた一輝と枠を巡って相争うライバルに他ならない。
油断ならないというならば彼もまた去年度はベスト8に名を連ねた猛者なのだから。
「勿論――やるからには出場する皆が俺のライバルだ。誰が相手でも油断するつもりは無いし、負けるつもりも毛頭無いよ」
「いうねぇ……そういうことならこの後、時間もあるし模擬戦でもやるかい？」
自信満々に言い切る一輝に桐原は楽しげに言葉を返す。
曰く、勝利することが好きだという彼にとって強い相手に勝つことは趣味のようなものだ。
景気づけの前哨戦とばかりに一輝を模擬戦に誘う。
「構わないよ。選抜戦も近いことだし、調整も兼ねて模擬戦をやるのは悪くないね。ア

ディもどうだい？　君もこの後は時間があるんだろう？」
「やんない。私は今年は出場する気が無いから。去年はともかく、今年は倍率も高そうだし」
そう言って肩を竦めるアーデルハイト。
彼女も彼女で《雷姫（ワルキューレ）》などと呼ばれるほどの強者であるのだが、如何せん本人に一輝らほどのやる気が見られない。
そも、騎士になろうとする動機が、両親が開いた孤児院の子供たちを助けるためだというものだから積極的に強さを求める理由がないのだろう。守るためには確かに力が必要だが、彼女の場合は力よりも金銭の方が重要だろうから。
「――でもそうね。気が向いたら二人の調整ぐらいには付き合ってあげる」
「よっし。そういうことから早速、訓練場に行こうぜ？　今日は始業式の初日だし、まだ速いこの時間から訓練場を使うような奴だってそう居ない――」
果たして――桐原の言葉がフラグだったのか。
彼が二人に提案を口にした直後のことだった。
『――おい、聞いたか？　一年の《紅蓮の皇女》が同じ一年の奴と決闘するって話だぞ！』
件の一年生に関する――――そんな噂話が三人の耳に入ってきたのは。

新世代

――ヴァーミリオン皇国のような小国にとって。
強い伐刀者（ブレイザー）は国宝にも勝る宝だった。
欧州の片隅に建国された私の祖国、ヴァーミリオン皇国。
嘗ての大戦、第二次世界大戦においてはナチスドイツを初めとした列強諸国に度重なる侵攻を受けたせいで戦後の内状はズタボロだった。
国土を焼かれたせいで土壌は植物の成長を受け付けず、建物は火器の放火や伐刀者の異能で倒壊し、無機物有機物問わず飲み込んだ戦火は国の人口を舐め取った。
戦後は親衛隊ならざる正規部隊の隊長らの議席制度による統治化を引いたことで敗戦国でありながら嘗ての軍事力を取り戻した軍事帝国ドイツや戦勝国となった日本と改めて確固たる同盟を結ぶことによって、異能研究において欧州で一歩先んじたイギリス、同じ戦火のツケを払った者同士と各小国と商業的条約を多く結ぶことにより、各国の商業流通ラインを抑えることに成功したアンタルヤ商業連邦。
戦前から多くの特質や、そもそも強い力を持った欧州の国家が、再興を遂げていく中、ヴァーミリオン皇国は小国故に、足踏みをしていた。

幾つかの不幸も影響しているのだろう。
例えば、有事は恐るべき軍事帝国ドイツに剣を立てられる立地にあること。これが影響して、彼らを恐れる大国が陰で暗躍していること。
軍事帝国ドイツを病的に狙う傭兵団の存在……。
戦争を経て、平和な世の中へと徐々に移りゆく国際情勢下であっても、ヴァーミリオン皇国の苦難は今尚続いていた。
そんな情勢下に誕生した規格外の才能を保有した皇女の存在。
それは未来を憂う国民、皇室にとってどれほどの希望だっただろうか。
私は自分を知っている。
現国王である父がどれほど自分を愛してくれてるかを。
私は自分を知っている。
自分が伐刀者（戦士）になると言った時、国を守るため尽くしてくれていた騎士たちが、どれほど自分に時間を割いてくれたかを。
――そうだ。私は私を知っている。
私が、どれだけ国民（みんな）に助けられてきたかを。
その恩を返したいと思った。
受けた借りを十数倍にして返して、皆を幸せにさせたかった。

強力な伐刀者の存在は、そのまま国の軍事力になる。
取り分け自分の資質、Ａランクともなれば欧州大国とて無視できない。
その存在感を持ってすれば、今のような愛する故国を踏み台にするようなマネを安易に行えなくなるはずだ。
だからこそ、私、ステラ・ヴァーミリオンは異国へ渡った。
強くなるために。騎士として立派になるために。愛する祖国を守るために。
第二次世界大戦――ヴァーミリオン皇国と同じく、小国でありながら大国と肩を並べて覇権を争った国家……日本へと。
何処よりも異能研究を先んじた魔導先進国へと。
故に――――。
「私と試合をしませんか？　正直、興味を我慢できなくて。保有魔力Ａランク。世界に数人と居ない伐刀者の実力というモノに」
ニコリと微笑みかける銀髪の妖精のような少女。
瞳の奥に研究者のような無機質な興味と、表面上は少女らしい柔和な、されど凍えるように冷え切った無機質な言葉を掛けられた時。
その挑戦を受けることに否応はなかった。
強くなる、強くなる。

そのために此処(日本)に来たのだから。

「ええ――良いわ」

例え相手が自分に首席入学を果たした自分に次ぐ騎士であろうとも。

例え相手が黒鉄の名を名乗る才女であろうとも。

「その挑戦、受けてあげる」

逃げることは勿論、負けるつもりは一切無い。

全ては強くなるために。

強者との果たし合いこそ才能を高める最高の舞台だ。

「でも挑まれたからには加減はしないわ。大怪我しても知らないわよ、シズク」

「お気になさらず。その時は貴女が私を上回っただけのこと、その敗北すら糧にして私の強さに変えましょう。全戦全勝など、愚かな私には出来ませんし、愚物は愚物らしく、愚直に一歩ずつ積んで往くのみです」

斯くして、新世代を担う伐刀者が此処に激突する。

破軍学園一年生、ステラ・ヴァーミリオンと黒鉄雫。

期待の新入生が波乱の幕開けを告げる――――。

☆

そして――。
「これは……」
「へえ」
「……派手ね」
一輝、静矢、アーデルハイトの三人が破軍学園に設置された第三訓練場に足を運んで目にしたのは試合と言うには壮絶な、異能と異能のぶつかり合いだった。
「はあああああああああ!!」
「……フッ――――!」
重なる刃は斬撃を火花と散らし、火炎と雨が二人を彩る。
攻撃以上に激突する熱意と熱意は、無関係の第三者たちをも巻き込んで、正しく息を飲むような極限の戦いを演出していた。
演者の名はステラ・ヴァーミリオンと黒鉄雫。
期待の新入生として破軍学園に入学した両者は魂を燃やしながら互いが互いを倒すべく異能と武術と意思を、星のように輝かせる。
この二人の激突を校内の噂で知り、物見遊山で足を運んだ三人は各々の感嘆符を口に出しながら両者の激突を観戦する。

「アレが噂の新入生ちゃんたちか。生で見ると尚のこと美人だねえ。特にやっぱりステラちゃんは僕好みの美少女だったよ」
「まず目を付けるところがそこ？　相変わらず節操がないわね貴方……。ところで一輝、あっちの女の子は貴方の身内じゃない？」
「うん。俺の妹の雫だね。でも……僕の知っていた頃とは比べものにならないぐらい強くなったみたいだ」
絶えずぶつかる二人を見ながら個性が目立つ感想を漏らす三人。
壮絶な試合に戦慄する他の観客を傍目に平静のまま言葉を交わす。
――まず目に付くのは、やはりステラ・ヴァーミリオン。
紅蓮の皇女と名高いAランク伐刀者だ。
実直に基礎を繰り返し、地盤を固めてきたのだろう。
振るう皇室剣術（インペリアルアーツ）に隙は無く、芯の通った体幹と規格外の魔力量が織りなす膂力は大地に叩きつけられるたび、訓練場そのモノを震撼させ、空気の壁諸共に大気を引き裂く。
さらには炎を司る異能が空間を熱し、近づくだけで否応なしに相対する者の体表面を焼き、接近戦を挑むことを躊躇わせる。
才能だけではなく、その原石を努力で以て研磨してきたのだろう。
努力に裏付けされた実力は、才能と合わさって真っ当に強い。

それこそ実力を十全に発揮するだけで他の騎士を鎧袖一触する程に。
だからこそ、拮抗を保つ相手騎士も並大抵では無かった。
同世代の女生徒よりも小柄な肉体を生かし、機動力を持って皇女を翻弄するように立ち回る黒鉄雫。彼女もまたステラに比する才女であった。
手に持つは小太刀、振るう異能は水。
真正面から全てを屠るステラとは違い、汎用性の高い異能を複数展開し、ステラ以上に完成された技を使って、規格外の力を受け流すその様は正しく対極。
異能から戦闘スタイルまで、ステラの逆を踏んでいた。
大胆に繊細に、しかし躊躇いなく。
まるで氷上を舞うスケート選手のように。
軽やかなステップや妖精の如くステラの猛攻を受け流す。
「炎と水か。字面だけの相性なら後者が圧倒的に勝ってるねえ」
「でも実状は違う。そうでしょ」
「そんなもの見れば分かるでしょ。ナニアレ、水が一瞬で蒸発して消えるとかどんな温度だよ……。綺麗な薔薇には棘があるって？　おお、怖」
「流石はAランクの伐刀者、だね」
雫の操る水の弾丸、それがステラに接触した直後に一瞬で蒸発するのを見送りながら

桐原が肩を竦め、彼の感想に二人が追従する。
伐刀者と偏に言っても彼らの強さは異能一括りに出来ない。
時を操るような因果干渉系の異能ならいざ知らず、原則として伐刀者の実力はおよそ異能を含めて三要素に決定づけられると言って良い。
即ちは、異能、魔力保有量、そして魔力制御である。
異能は伐刀者として出来ることを決定づける。
例えばステラが炎を操るように、雫が水を操るように。それぞれの異能属性が持つ力は個々人の戦術や戦い方を決定づける最大の要素である。
前者ならば単純に燃やす、後者ならば溺れさせる、流す、など。
それぞれの異能によって伐刀者は己が戦い方を編み出していく。
では、魔力保有量はどうかと言われれば、これは地力を決定づける要素だ。
当然ながら伐刀者とて人間だ。
動けば疲れるし、限界もある。
その限界を決定づけるのが魔力保有量である。
異能がどれほど出力できるか、それは保有する魔力量によって決定づけられる。故にどんなに強力な異能を持っていてもそれをどれだけ出力、そして維持できるかは、この保有魔力次第と言うことだ。

異能出力と持続継戦時間。この二つを決するのが魔力保有量だ。
そして最後の要素、魔力制御はその名の通り、伐刀者が持つ魔力を己が意思でどれほど掌握できているかという要素だ。
先天的な要素に左右されがちな先二つの要素と異なり、センスにも寄るがおおよそ鍛錬によって決されるこれは異能を操る上で尤も重要な要素であると言って良い。
例えばステラ・ヴァーミリオンのようにただ無作為に振るうだけで脅威となり得るほどの出力値をたたき出されるならば良い。そして無作為に振るうだけの魔力量があるならばさして重要視される要素では無いだろう。
だが、大抵の伐刀者は世界有数の才能を誇るステラとは違い、魔力量は平均的なものになる。無作為に力を振るうだけでは簡単に息を切らしてしまうのだ。
それは雫という才女であっても例外では無い。彼女とて伐刀者の名家として日本を担ってきた一族に産まれた才女。保有魔力量は平均的な水準に勝るものの、ステラのように規格外の出力を続ければあっという間に息切れしてしまう。
だからこそ安易に水使いだからと言って会場を水で満たして溺れさせるや大瀑布で以て押し流すなどの力業（パワープレイ）は行えない。
そこで重要になるのが魔力制御である。
魔力制御は技量次第で少ない魔力で様々な異能を発動させる、或いは同時に別々の技

を発動、維持することが出来るのだ。
どれだけ高い魔力や強い異能を持っていようと出来ることは異能制御に依存する。
炎で燃やす、などといった単純な異能ならばいざ知らず、己が異能の汎用性で以て多くの魔術を使うためにはこの魔力制御という要素が重要になってくるのだ。
そして、そうした三つの要素から試合を見ると、両者の異能は属性相性の観点から雫が、魔力制御もまた雫が、魔力保有量では圧倒的にステラが勝っていた。
「……つくづく才能は恐ろしいわね。身内に炎使いがいるから分かるけど、あんな出力で戦い続ければあっという間にダウンしちゃうのに、皇女殿下が息を切らせる様子は全くない。私たちが太陽光パネルで電力維持しているのに対して、向こうは差し詰め原子力を使った超発電っていう所かしら？」
「君の例えはいつも分かりにくい。どういうセンスをしてるんだか……」
「心外ね。貴方の理解力が乏しいだけじゃない。この女好きゾウリムシめ」
「どういう罵倒だよそれ」
「ま、まあまあ二人とも落ち着いて……」
試合を傍目に言い合いを開始しそうな二人の中を取り持ちながら一輝は、試合の経過を予測する。
〝戦況は今のところ互角に見えるけど、このまま順当に進めば雫の負けかな。魔力量

という時間の限りがある以上、ヴァーミリオン皇女に拮抗する形で魔力を絞り続けていれば使用量に問わず、先に力尽きるだろうしね〟

そう、試合自体は一見して互角に見えるだろう。

他の観客席から聞こえる歓声も、あのステラ・ヴァーミリオンと互角に渡り合っていると驚嘆と感心の声が聞こえてくるぐらいだから。

しかし、少し目の利く者が見れば一瞬で理解できるはずだ。

この勝負、全うに戦えばどう頑張ってもヴァーミリオン皇女には届かないと。

雫の実力は一輝から見ても凄まじい。

もう合わなくなって数年と立つが、彼女の、特に異能を操るセンスは数年前とは格も質も段違いだ。

ヴァーミリオン皇女の圧倒的な異能（チカラ）に対抗するため、雫は絶えず大気の温度を引き下げる冷気と、自身を覆う水のベール、そして水の弾丸と刃に纏わせた高圧水流……別々の異能を四種同時に発動させ、制御させている。

その魔術と比べて少ない魔力消費と四つもの魔術を発動、維持させる魔力制御能力と演算脳は常人ならばとうに脳が焼き切れているほどの負担の筈。

そんなマネを行いながらも余裕で戦闘をこなす様は同世代では群を抜いて圧倒的だと言い切って良い。

だが、それでも世界有数の原石には届かない。
隔絶した魔力保有量を持つステラに息切れの気配は無く、それどころか自身と互角に渡り合う相対者を認め、今も出力が上昇し続けている。
零を捉えきれなかった刃が地面に激突するたびに会場に走る地震が増大していく様子からも、それは簡単に窺える。
異能と技による正面からも魔力と体力削り合い。
その舞台においてやはりステラ・ヴァーミリオンは圧倒的だった。
だからこそ、このままでは順当に零が敗走する。
それが、この試合の結果である。
「……」
一輝の目が零の方へと向いた。
視線が捉えるのは懐かしい妹の顔。
もう数年来となる妖精のような少女の顔を一輝は見て……。
「――――……どうかな」
友人たちにも聞こえないほどの小声で。
嘆息するように、そんな言葉を口にしていた。

……

……。

〝強い……！〟

もう何度目かの激突にステラは内心舌を巻く思いだった。

ステラは自分をよく知っている。

自分の才能が稀少なモノであることも、恵まれていることも知っている。

知っているから今までそれを磨くことにかけて誰よりも妥協してこなかった。世界有数の才能（げんせき）。だからこそ努力して、努力して、努力して……才能を十全に発揮できるだけの実力を付けてきた。

才能を使わずとも実力はヴァーミリオン国内でも有数。日本に置いてすら同世代なら上位に踏み込むほどのものであった。

しかし、ならばそんな自分とただの技量のみで渡り合う目の前の人物は何なのか。

――当初ステラは渾身の初撃、それを以て敵の技量と異能の出力を測り、測りきって上で真正面から踏み砕くというつもりで戦いに挑んだ。

その結果、膂力はやはり自分が圧倒しており敵は正面から受けることを避けた。なら

ばと火炎を放ってみれば水を放って、相殺しに掛かってきた。
同じ事を繰り返すこと五度。その時点でステラは己の火炎が敵の水を諸共しない出力を測りきっていた。
そうして満を持しての六度目の攻防。
ステラは蒸発を超えて尚、雫にまで届く熱量の火炎で以て水の防御ごと試合を終えようと留めに掛かったのだが、彼女は予想だにしない手段でステラの思惑を超えてきた。
『透過睡蓮』
紅蓮を纏いて雫を狙う直後、紅蓮に纏わり付くように、一瞬のうちに形成された水の膜が紅蓮の炎を覆い隠してしまったのだ。
五度の火炎との激突で大気を漂うこととなった水。
水蒸気として無意味に漂っていたそれを雫は一瞬のうちに集合させ、火炎そのものに纏わり付かせたのだ。
それは規格外の魔力制御が成せる技だ。
一瞬のうちに水を形成するなど水蒸気(地盤)があってもそう簡単には行えない。ある程度、形成までにタイムラグが生じてしまう。
一見して何も無い空間に何かを生み出すにはそれ相応の時間と力が必要だから。
炎にせよ、水にせよ、どれだけ発動を早めようと限界はある。

まして敵の魔術に被せるように行うともあらば、後出しで行う雫の魔術成立速度はどうしてもステラに劣っていなければ可笑しい。
不可能を可能にするためには、一から生み出すのでは間に合わない。……だからこそ雫は予め準備していたのだ。
五度の異能激突により生じた水蒸気、それが大気に融けて尚も、魔力制御を持続させることによって。
そう、彼女の魔術は霧散しても続いていたのだ。
大気に満ちていた水蒸気は今尚、彼女の支配下にあった。
そしてずっと狙っていた。
ステラが高温度の火炎を雫に打ち放とうとするその間隙を。
『ッ！　しまッ……』
多少の教養があれば彼女の狙いに気づくことは簡単だ。
水が非常に温度の高い物質と接触することにより気化されて発生する爆発現象。
即ち――水蒸気爆発。
斯くして光がステラの視界を染め上げる。
轟く轟音と身を打つ衝撃。
相手の攻撃を狙い撃った雫のカウンター。

こうして想定外の強烈な一撃を、ステラは試合開始序盤に受けてしまったのだ。

そして――現在。

ステラは安易な超出力に頼らず、真正面からに斬り合い、魔術の打ち合いによって試合を拮抗させていた。

敵は流動する水を余さず掌握する規格外の魔力奏者。

形を失ったから、発動しきったからと、確信して踏み込めば待っているのは水中に潜む水魔による見えない罠。

ならば踏み込むのでは無く削りきって、その内状を詳らかにするまでだと、炎と剣を絶えず雫に叩きつけながらステラはひたすらに攻める、攻める。

体力勝負ならば自分の土俵、しかもこの距離ならば先の水蒸気爆発のようなカウンターで雫自身をも巻き込んでしまう。

己の強みと場所の有利、それを弁えた上でのこの間合い取りと選択。

慢心も油断も消しきった攻防は……しかし今も終わりが見えない。

それどころか僅かな気の緩みが勝敗を分けかねない拮抗に持ち込まれている。

この近距離で刃を交わしながら四つの魔術を操ってみせる制御能力も然る事ながらステラを相手に真正面から斬り合うことを可能とする小太刀の術は達人並み。

異能を操る技も、扱う武術も一級品なれば、同世代において競う相手が圧倒的に少なかったステラにとってはこの状況は予想外も予想外。
自らの異能と技量を尽くさねばならない思考戦は、ただ振るうだけで他を圧倒した彼女には未経験の戦であった。
〝世界は広い……か〟
やはり留学して正解だったと感動交じりに思った瞬間、
「……弱い」
ぼそりと、感動した相手は自分と真逆の感想を漏らしていた。
その言葉に思考が一瞬のうちに冷える。
同時に胸の奥がチリっと熱を帯びた。
「……何ですって？」
「弱い、と。そう言ったんですよ、皇女殿下」
キンッと敢えて渾身の一撃を小太刀でステラに叩き込みながら、雫はその衝撃を利用して大きく間合いを取って下がる。
約十メートル。刃は届かないが魔術は届く、異能戦の間合いで以てステラと雫は言葉を交わし合う。
「Aランクの伐刀者。ともすればただ才能を振るうだけで他を圧倒する実力を持ち合わ

せた私などとは及びもつかない天才です。それがまさかこの程度では、そんな感想を抱くのも仕方ないでしょう」
「へえ……言うわね。私と互角程度に持ち込んだ程度で――」
「言いますよ。私を相手に互角程度では」
呆れるように、だから肩透かしを食らった思いだとでも言うように。
「先の水蒸気爆発を受けてから貴女は戦術を切り替えた。安易に異能を使えば手玉に取られると勝手に思い、自身の強みを生かしたスタミナの削り合い、接近戦での勝負へと持ち込んだ……ですが、果たしてその必要がありましたか？」
「どういう意味？」
「貴女は自分自身が見て得ていないんですか？　己の異能を利用されて予想外の一撃を貴女は受けた……で？　一体どんな不利が貴女に働いたのです？」
「そんなこと……」
態々、自分の口から言う必要は無いだろう。
正面から安易に力勝負を仕掛けることは危険だと言うこと。
相手は自分よりも圧倒的に魔力制御に長けていると言うこと。
今更、口にするまでも無い雫自身の脅威。
雫はステラの内心を読み取ったように眉を顰めながら続ける。

「大方、私が巧みな戦術を使うから、私が貴女より魔力制御に長けているからとでも思っての判断なんでしょうけど……それが一体何ですか？」
「何ですかって……だから、貴女ね。そんなことをされると分かっていて真っ正面からぶつかりに行くほど私が馬鹿に見えたわけ？」
「馬鹿に見えるではなく、馬鹿だと思っていますよ。だって貴女、ほぼ無傷じゃ無いですか」
辛辣な雫のその言葉は、しかし、事実だけは的確に衝いていた。
そもそもカウンターどころか敵によっては、それだけで勝敗を決めるだろう超至近距離による己が異能の誤爆、水蒸気爆発。
それを受けた状態で、ステラはことここに至るまで万全に等しい雫と互角の戦いを繰り広げてきた。どころか、今では体力の削り合いを舞台に雫を上回らんとすらしているのだ。
残存体力は雫と比べ合うだけの余力を残し、剣術は水蒸気爆発という一撃を受けた上で平時と変わらず尚健在。ならば結論は言うまでも無い。
先に喰らわせた一撃は、ステラに何の影響も齎していなかったと。
「貴女はAランク。不意打ちとはいえ並大抵の攻撃では無意識に纏う魔力防御があらゆる攻撃を遮断する。圧倒的な火力と、それを裏付ける魔力が生み出す副作用（防御力）。戦術を考

えずとも実力を振るうだけで他を圧倒するのが貴女でしょう」
十全に力を振るう。
ただそれだけでステラ・ヴァーミリオンは勝てるのだ。
にも関わらずステラはそれをしなかった。
一撃予想だにしない一撃を雫に食らっただけで過度に雫を警戒し、安易に踏み込むのを止め、異能を振るうことを躊躇った。
ただ踏み込み、異能を振るう。
それが何より雫には恐ろしかったというのに。
とはいえ、雫の方にもそれをさせないための算段はあった。
というよりそれが結実した結果が、今だと言えよう。
雫はステラの才能を正しく理解していた。
並大抵の一撃が効かないなどハッキリと分かっていた。
同時に、その才能が生み出す弊害についてもいくつか予想を持っていたのだ。
先のカウンターで使った水蒸気爆発もその候補の一つ。
予想だにしない一撃と、彼女から見て彼女を上回る技量の主である証明。
この二つを持ってして雫はステラに、今まで未経験だっただろう自分に迫る強い同世代の伐刀者であるという印象を叩きつけた。

そして、警戒心を煽り、考えなしの攻撃を封じ込めた。
これは偏に、ステラが同世代は愚か、同じ伐刀者においても彼女と試合を行える人物と戦ってこなかったという戦闘経験の穴を突いた心理トラップだ。
ステラほどの才能、そして十代中盤という年齢。
そしてヴァーミリオン皇国という環境。
これら三つを考えた上で、ステラが態々日本に留学してきたという事実から見れば彼女が才能は本物でも、戦闘経験に掛けた伐刀者であると予測するのは簡単なこと。
ならばこそ、その穴につけ込むのは戦闘者として当然の結論である。
必要ない警戒心を抱かせ、力任せの試合をさせないようにする。
ステラに自分を考えさせ、読み合いという思考戦の場にステラを引き込む。
そこまで見越した上での水蒸気爆発（トラップ）。
思い通りに進む試合に、零は嘆息を隠せない。
だって、その罠ごと一蹴されるだろうと思って挑んだのに。
世界有数の才能。
まともに戦えば手も足も出ない絶対的な暴力。
以前に編んだ戦術が意味を成さない天災。
敗北必至の試合になると見越した上でのこの一戦。

蓋を開ければ何処までも自分の思ったとおりとあれば呆れも漏れるというもの。
「どうやら、貴女と戦うのは早すぎたようです。いえ、私が急いただけですか……ともあれ、ステラさん――今回は私が勝ちますが次は、見せてくださいね。Aランク伐刀者が持つ圧倒的な才能を……」
既に勝ちは見えていると。
この上ない挑発を口ずさみながら雫は真正面から踏み込んだ。
「言ってくれるじゃ無い……！　だったら今から見せてあげるわ！　貴女が見たがっている才能を！　貴女が確信した勝利ごと、貴女の全力を吹き飛ばしてあげる!!」
度重なる侮蔑した挑発まがいの言葉に、憤ったステラが雫の踏み込みに合わせて迎撃の刃を向ける。どういった理由で勝利を確信したのかは不明だが、こうまで言われればステラとて怒りを隠せない。
元々、短気な性も相まって雫の挑発に応え、ステラは真正面から異能と力で踏み砕くことを決意しながら全力で振るった大剣で雫の胴を横一文字に払う。
結果――――雫の上半身と下半身が真っ二つに分かれた。
「……え――――？」
想像もしなかった結論に意識が消し飛ぶ。
――《七星剣舞祭》などのプロ魔導騎士が付くような場を例外として、学生騎士での

試合では振るう《固有武装（デバイス）》は『幻想形態』、相手の身体に傷を残さず体力のみを削る形態で顕現し、使用を許可される。

だからこそ、このような場ではどれほどの威力、どれほどの力で相手に攻撃を叩きつけようとも凄惨な結果にはならないのである。

しかし、現実はこの通り、零の肉体は真っ二つに泣き別れている。

その視覚的衝撃と、惨状に対して得物に返ってきた手応えが軽いことに困惑し、二重の衝撃でステラの思考に間隙が生じる。

そしてステラが、現状を把握するよりも先に。

「ほら――やっぱり私の勝ちです」

思い通り動いてくれるステラに対して、上半身だけとなった零が冷笑しながら囁いた。

零はそのまま勢いに任せて上半身だけとなった肉体でステラの下へと倒れ込み、その唇に自分の唇を重ねて――刹那、その姿を変容させる。

「――――ッッ!!!」

驚愕に歪むステラの顔。

ようやく全ての事実を察したステラは必至の状況から逃げだそうと身を捻るが既に遅い。

雫の上半身に模した質量を誇る水の塊が口唇接触を通して、ステラの体内へと注ぎ込まれた。雫の魔力制御によって狙い通り、水はステラの肺へと侵攻し、速やかに必殺の状況を練り上げる。

一手遅く、ステラは事ここに至って思い知る。

先ほどまでステラが戦っていたのは水の分身。

既に勝ち筋は作り上げられていたのだと。

「言ったはずです。私の思惑から一歩も外れなかった時点で、貴女の敗北は必至だと――では、まだ見ぬその才能ごと、湖中に溺れてください」

ダメ押しとばかりに後頭部に叩き込まれる殴打。

それを留めにステラの意識は完全に吹きとんだ。

――皆底に潜む魔女。

彼女の勝ち筋に聞き入った時点で、ステラの敗北は決まっていた。

斯くして未だ羽ばたきを見ぬ妃竜は底の見えない闇に落ちていく。

落ちていく――――。